

烈火の太洋5

反攻の巨浪

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	南海の刃 やいば	9
第二章	こじ開けられた海	37
第三章	トラック強襲	53
第四章	銀翼の盾	99
第五章	夜の「武蔵」 むさし	151
第六章	二つの脅威	203

太平洋

ミッドウェー島

エニウェトク環礁

トラック環礁

クェゼリン環礁

マーシャル諸島

ニューアイルランド島

ブーゲンビル島

チョイセル島

サンタイサベル島

マライタ島

ナウル

ニューヘブリデス諸島

ニューカレドニア島

ガダルカナル島

ニュージョージア島

シオートランド島

サモア

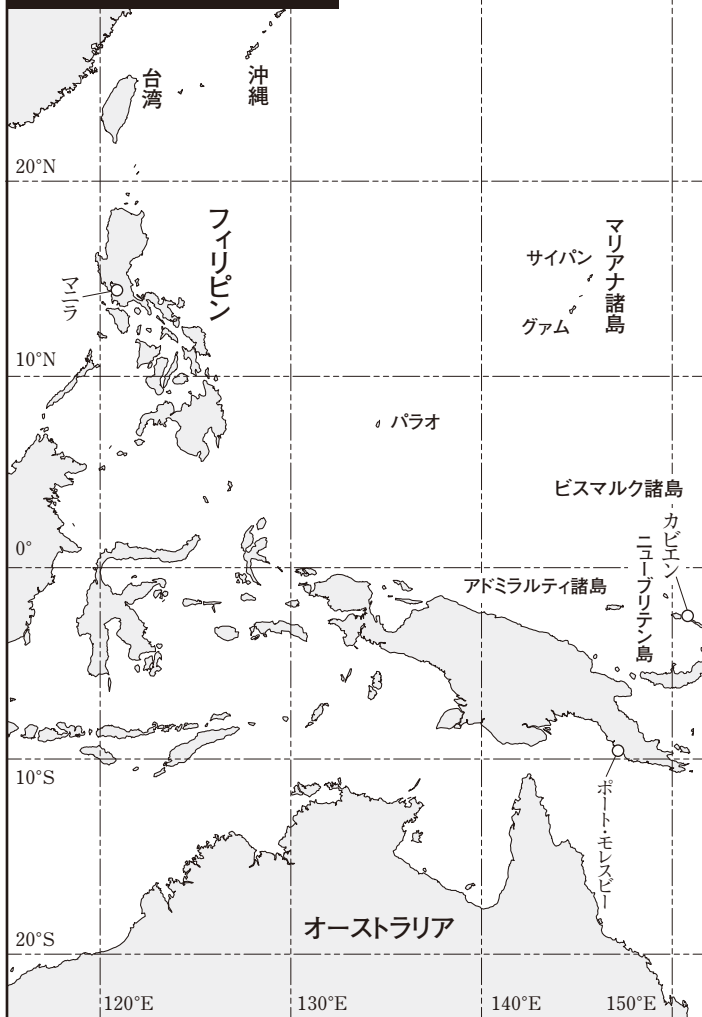
フィジー

160°E

170°E

180°

南太平洋要図





烈火の太洋 5

反攻の巨浪

第一章

南海の刃^{やいは}

1

頭上に広がる光景は、無数のガラス屑をぶちまけたようだった。

前後左右、どの方向を見ても、数限りない星々が夜空を彩っている。

その星明かりを、複数の黒い影が遮っている。

「空の要塞」の異名を持つ、ボーイングB17フライング・フォートレスではない。胴体が太く、やや寸詰まりの印象を受ける。

B17よりも鈍重そうに見えるが、この機体がB17同様、分厚い防御装甲に鎧われていること、多数の旋回機銃座を装備する難敵であることを知らない戦闘機搭乗員はいない。

コンソリデテッドB24リベレーター。米陸軍の航空部隊に配備されたもう一つの四発重爆撃機が、トラック環礁に向かっているのだ。

「岸部一番より指揮所。目標捕捉。位置、楓島よりの方位二三〇度、四五哩。高度四〇（四〇〇メートル）。先頭の梯団は一五機。後方にも複数の梯団あり。今より攻撃する」

第二五一航空隊の飛行隊長と指揮官機の偵察員を兼任する岸部久幸大尉は、無線電話機を通じて、楓島にある指揮所に報告を送った。

艦上攻撃機や陸上攻撃機であれば、無線機のキーを叩いてのやり取りになるが、二五一空の装備機である夜間戦闘機「月光」二一型は、盟邦ドイツより導入した無線電話機を標準装備しており、肉声で指揮所と交信できる。

視界の不自由な夜間であるにも関わらず、トラック環礁の前方四五哩でB24の編隊を捕捉できたのは、電波探信儀によって敵機の位置を探知し、無線電話機を通じての誘導を受けたおかげだ。

「指揮所より岸部一番。視界はどうか？」
「戦闘に支障ありません」

二五一空司令小園安名中佐の問いに、岸部は即答した。

岸部機以下の月光は、B 24 の編隊を仰ぎ見つ、同航戦の態勢を取っている。

こちらからは、星明かりを背にした敵機の姿が見えるが、敵の射手からは、月光の姿はほとんど見えないはずだ。

理想的な攻撃位置と言っている。

「指揮所了解。健闘を祈る！」

小園の声を確認すると、岸部は無線機の周波数を隊内通話に切り替えた。

「岸部一番より全機へ。今より攻撃する。目標との距離を極力詰め、無駄弾を出さぬよう注意しろ。かかれ！」

「了解！」

岸部の指揮下にある二三機の偵察員が、無線電話機を通じて唱和した。

操縦員を務める辻文太郎飛行兵曹長が操縦桿を

手前に引いたのだろう、岸部機が機首を上向ける。

両翼に装備する三菱「火星」一一型の唸りが高まり、月光が加速される。

岸部は、照準器を通じてB 24を凝視した。

影しか見えないが、それだけにかえって不気味だ。途方もなく巨大な鳥を、真下から見ているようにも感じられる。

月光の接近を気取られたら最後、一二・七ミリ弾の鉤爪が、ジュラルミン製の主翼や胴を引き裂くことは間違いない。

獷猛な肉食獣に、忍び寄るような心地だ。

B 24 が近づき、機影が拡大する。

「ちよい右」

「ちよい右、宜候」

岸部の指示を受け、辻が機体を右方にずらす。

「ちよい前」

「ちよい前。宜候」

辻の復唱と同時にエンジン・スロットルが開かれ、

月光がB 24に食い下がる。

照準器の環が胴体中央から前に移動し、機首よりもやや下がったあたりを捉える。

「今だ！」

小さく叫び、岸部は発射把柄を握った。

耳元でリベットを打ち込むような音が響き、背中を連打されるような衝撃が伝わった。

真つ赤な太い火箭が岸部の頭上を通過し、B 24に突き刺さった。火花と共に、黒い塵状の破片が飛び散る様が見えた。

B 24が、右前方に機首を下げた。

同時に辻がエンジン・スロットルを絞り、機体をB 24の後方に占位させた。

B 24は真つ逆さまになり、炎も煙も噴き出すことなく、闇の底に向かって墜落し始めた。

「よし！」

岸部は満足の声を上げた。

月光二一型は、戦闘攻撃機「月光」を二人乗りに

改め、潰した電信員席に上向き斜め銃を装備した、帝国海軍初めての夜間戦闘機だ。

斜め上向き斜め下向きに取り付けた機銃で、敵機と平行に飛びつつ銃撃を浴びせる。見越し射撃の必要はなく、速度差も小さいため、命中率が高い。位置によっては、敵機の防御機銃の死角から攻撃をかけられる。

考案者の小園安名中佐は、軍令部、航空技術廠、横須賀航空隊等に斜め銃の有効性を説いて回ったが、前例がないため、賛同はほとんど得られなかった。

ところが、盟邦ドイツが既に斜め銃を採用し、米英の重爆撃機相手に大きな戦果を上げているとの情報伝わり、日本でも斜め銃の採用機運が高まり、実戦による試験が行われた。

三月初め、斜め銃を装備した月光をラバウルに派遣し、敵重爆の迎撃に用いたところ、見事な戦果を上げたのだ。

海軍はこの結果を見て、月光を戦闘攻撃機と夜間

戦闘機の二機種に分けて生産すると決定し、前者を

「月光二一型」、後者を「月光二二型」と命名した。

月光二一型には、二機種がある。

斜め銃に、長銃身の二〇ミリ二号三型機銃二丁を用いた「甲型」と、ドイツのラインメタル社から導入した羅式三〇ミリ機銃一丁を用いた「乙型」だ。

甲型の生産は四月中旬から、乙型の生産は五月末から、それぞれ開始された。

最初の月光装備部隊となった二五一空は、甲型一八機、乙型九機を擁している。飛行隊長の直率中隊である第一中隊は、乙型の装備部隊だ。

定数は二七機だが、この日の邀撃戦では甲型二機、乙型一機がエンジン不調のため、出撃取りやめとなり、二四機がB 24の迎撃に上がった。

岸部機は、B 24の胴体下に小判鮫のように張り付き、斜め銃の一連射を浴びせたのだ。

直径三〇ミリの大口径弾は、B 24の機首下面を貫通してコクピットに飛び込み、操縦者を殺傷したに

違いない。

岸部機の周囲で、B 24が次々と火を噴く。

下側からエンジンを銃撃された機体は、炎と黒煙を噴き出して空中をのたうち、燃料タンクを貫通された機体は、片方の主翼全体が炎に包まれる。

B 24の火災炎は、周囲に位置する僚機の姿を照らし出す。

自機の姿が浮かび上がっていることに気づいたのか、慌てて右旋回をかけたB 24が、真下から月光の銃撃を浴びる。

二丁の二〇ミリ機銃から射弾を集中されたB 24は、被弾炎上した僚機同様、エンジンから火を噴き、夜の闇を炎で切り裂くようにして、海面へと墜ちてゆく。

B 24の機首や胴体下面、尾部の機銃座に発射炎が閃き、真下、あるいは斜め後方に射弾が飛ぶ。

月光一機がともに銃撃を浴び、強烈な閃光を発して爆発する。斜め銃の弾倉に敵弾が命中し、二〇

ミリ弾が誘爆を起こしたのだ。

続けて、月光一機が左エンジンに被弾する。

炎と黒煙を噴き出し、自らの姿をさらけ出した月光に、複数のB 24から射弾が集中される。多数の火箭に貫かれた月光は、ひとたまりもなく碎け散る。

忍者のように敵重爆に忍び寄り、不意打ちをかけて撃墜するのが夜間戦闘機の戦い方だが、決して無敵ではない。

そのことを思い知らされる光景だった。

「岸部一番より各機。深追いはするな！」

岸部は、全機に下令した。

陸攻の偵察員から機種転換した身だが、生き残るためのコツは、江田島同期の戦闘機乗りから手ほどきを受けている。

一撃離脱に徹し、敵機の銃火に機体をさらす時間を最小限に留めるのだ。

出撃前の打ち合わせでも、この点は部下に徹底していた。

「辻、後方の梯団に向かえ！」

「後方の梯団に向かいます！」

辻が復唱し、高度を下げると共に、エンジン・スロットルを絞る。

岸部機の頭上を、幾つもの黒い影がよぎる。

B 24の第二梯団が、トラックに向かっているのだ。第一梯団の状況は分かっているはずだが、退却する様子はない。針路も速度も変えず、トラックへの進撃を続けている。

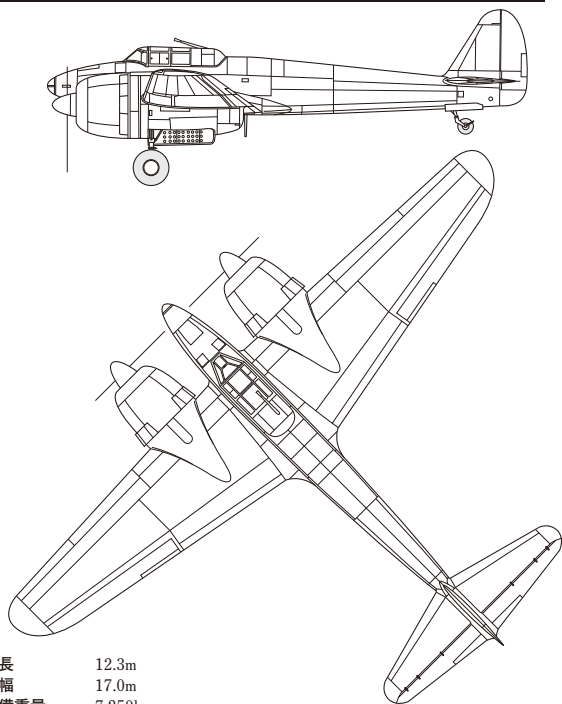
岸部機よりも先に、部下の月光が第二梯団に仕掛けた。

真つ赤な火箭が、後ろ下方からB 24の主翼や胴に突き刺さる。

一連射では墜とせなくとも、第二撃、第三撃と銃火を浴びせると、堪えかねたように火を噴く。

エンジンから発火したB 24は、黒煙を引きずりながら高度を落とし、コクピットを撃たれた機体は、原形を留めたまま墜落する。

日本海軍 夜間戦闘機「月光」二一型乙



全長	12.3m
翼幅	17.0m
全備重量	7,250kg
発動機	三菱「火星」一一型 1,530馬力×2
最大速度	575km/時
兵装	20mm機銃×1丁(機首固定) 7.7mm機銃×2丁(機首固定) 30mm機銃×1丁(上方斜め銃)
乗員数	2名

二式双発戦闘攻撃機に大口径の斜め銃を搭載し、対重爆撃機迎撃戦に特化した機体。視界の利かない夜間、電探を備えた基地から無線電話装置により誘導され、敵の進路上で待ち構える。20ミリ機銃を2丁搭載した甲型と、30ミリ機銃1丁を搭載した乙型があり、いずれも敵爆撃機と並行して飛行し、至近距離から攻撃を行う。

太平洋の島嶼戦では、B17、B24などの重爆撃機による爆撃が繰り返されているが、本機の配備によって状況が打破出来ると思われる。

昼間であれば、海面には墜落した機体の波紋が幾つも確認できたであろうが、今は夜だ。墜落機は闇の底に呑み込まれるようにして、姿を消してゆく。

「左三〇度の敵機をやる！」

「目標、左三〇度の敵機。宜候！」

岸部の指示を受け、辻が月光を旋回させる。

エンジン・スロットルが開かれ、月光が下方から

B 24に迫りすぎる。

夜間戦闘機が存在に気づいたのだろう、B 24の第二梯団は大きく散開し、逃げ惑っている。太く、ごつごつした特徴的な機体が、右に、左にと旋回し、胴体下面と尾部の機銃座が、旋回機銃を乱射する。

一度ならず、一二・七ミリ弾の青白い火箭が、コクピットの至近を通過する。

直撃すれば墜落は必至だが、岸部機はぎりぎりのところで敵弾をかわしている。

B 24は左右への旋回を繰り返すが、四発重爆と双発戦闘機では、運動性能が違う。

辻は、月光を敵機に追従させ、距離を詰めてゆく。見えないロープで機体同士が繋がれ、巻き取られているようだ。

岸部は照準器を覗き込み、慎重に狙いを定めた。B 24の影が白い環の外にはみ出したところで、発射把柄を握った。

連射音が耳朶を打ち、背中から衝撃が伝わる。

三〇ミリ弾の太い火箭が噴き延び、B 24の胴体下に吸い込まれる。辻がエンジン・スロットルを絞り、一旦B 24と距離を置く。

撃墜か、と期待するが、岸部機の射弾は、胴体下面の機銃座を沈黙させたただけだ。敵機は依然、トラックへと飛び続けている。

辻がエンジン・スロットルを開き、再びB 24との距離が詰まる。

防衛火器の死角に入り込んだようだ。敵弾は、岸部機には飛んで来ない。

今度こそ！——その思いを込め、岸部は発射把

柄を握った。

三〇ミリ弾の太い火箭が、機首下面からコクピットの真下あたりまでを、ヤモリの舌のように舐めた。辻がエンジン・スロットルを絞り、B 24の後方に占位する。敵機は大きく傾き、真つ逆さまに墜落し始める。

墜落に伴う気流の乱れに巻き込まれたのか、岸部機が大きく揺れ、機首が前方へと傾く。B 24が、月光を道連れにしようとしたかのようだ。

辻が機体を操り、姿勢を立て直したところで、前方下に多数の発射炎が閃いた。

「岸部一番より全機へ。戦闘中止！」

岸部は状況を理解し、麾下全機に下令した。

敵編隊はトラック環礁の上空に侵入したのだ。これ以上食い下がれば、対空砲による同士打ちの危険がある。

敵機が陸地や錨地の上空に踏み込むまでが、夜間戦闘機の領分だった。

（どこまで敵機を阻止できたか）

そう思い、岸部は眼下の闇を見つめた。

敵弾が落下し始めたのか、発射炎とは明らかに異なる爆発光が、続けざまに閃き始めた。

2

「八月二四日夜半、トラックに來襲した敵機は約六〇機と見積もられます。二五一空の月光が迎撃にあたり、一八機を撃墜。未帰還機は月光三機。秋島の砲台と楓島の飛行場施設が損害を受けましたが、いずれも軽微。以上が、一一航艦司令部からの報告であります」

連合艦隊の航空甲参謀日高俊雄中佐は、居並ぶ幕僚の前で、切れ間なく報告した。

今年二月一八日、山本五十六大將が連合艦隊司令長官から退任したとき、日高は、

「空母か基地航空隊の飛行長、もしくは機動部隊の

参謀に異動させて欲しい」

と、人事局に希望した。

日高は元々、飛行機乗りになりたくて海軍に奉職した身だ。連合艦隊の参謀は、自分には不似合いな役どころであり、航空戦の現場で働きたいと願っていた。

だが山本は、

「新長官は航空戦に疎い。幕僚に航空の専門家を増やすよう人事局に掛け合ったが、まだまだ足りない。貴様は連合艦隊の中樞に留まり、新長官や参謀長を補佐してくれ」

と日高に言い渡し、海軍省も引き続き日高に連合艦隊司令部での勤務を命じたため、留任が決まったのだ。

肩書きは「航空参謀」から「航空甲参謀」に替わり、江田島で二期下の三宅正少佐が「航空乙参謀」として日高の補佐役を務めることになったが、日高としては失望を禁じ得ない。

「花形部署から離れて、ガソリン臭い現場に行きたいなんて、貴様は変わっている」

面と向かってそんなことを言った江田島の同期生もいるが、日高は、飛行機の香りを間近に感じられる場所にいたかったのだ。

新司令部の発足に伴い、司令部が呉鎮守府から横須賀航空隊の庁舎に移動したため、「飛行機の近くにいたい」という望みだけはかなったが。

「月光というのは、使いのある機体だな」

長官席に腰を下ろしている、でっぷりと肥えた将官が、感心したように言った。

山本五十六大将の後任として、新たな司令長官に親補された近藤信竹大将だ。

小柄で痩せぎすだった山本とは対照的な肉体の持ち主で、中国の大人を思わせる風格がある。

当初、山本の後任には、横須賀鎮守府司令長官の古賀峯一大将か、軍事参議官の豊田副武大将が有力視されていたが、海軍大臣の塩沢幸一大将が、

「近藤は軍令部の第一部長や次長を務めた経験があり、海軍の作戦計画に精通^{せいつう}している。連合艦隊の参謀長や第二艦隊の長官も務め、艦隊の運用にも慣れている。GF長官には、最適^{最適}任だと考える」

との理由で近藤を推^おしたのだ。

空母や航空部隊を指揮した経験はないが、参謀長以下の幕僚に航空戦の経験者が多く、新長官を十二分に補佐できるものと考えられていた。

近藤は、言葉が続けた。

「一月のダンピール海^{かいきょう}峡^{きょう}沖海戦では、米新鋭戦艦^{せんかん}二隻を雷撃し、戦鬪の流れを大きく変えた。トラック上空での邀撃戦でも、敵重爆多数を撃墜した。航空^{航空}本部^{本部}が基地航空隊の新しい主力として、月光を強く推したのも理解できる。戦場で、実力が証明されてこそその兵器だからな」

「月光の力だけではありません。先の邀撃戦で戦果を上げられたのは、トラックに配備された電探が敵機を遠方で探知したこと、二五一空の飛行長が無線

電話機を通じて、搭乗員を誘導したことの二つに負^おうところが大です」

「甲参謀の言う通りです」

日高に続いて、参謀副長の柳本^{やなぎもと}柳作少将が発言した。

参謀副長は新たに設けられた職だ。参謀長の補佐役と、不在時の職務代行を担当する。

柳本は、新兵器に対する炯眼^{けいがん}を持つ人物で、「主だった艦艇や前線基地に電探の配備を」と開戦前から主張し、軍令部への働きかけも行っていた。

「盟邦ドイツでは、既に多数の電探を本土や占領^{せんりょう}地に配備し、電波による監視網を張り巡らしております。米英の重爆部隊による独本土への爆撃に、独空軍が果敢^{かかん}な邀撃戦を展開し、敵に出血を強^しいているのも、電探があつてこそだと在独大使館付武官から報告が届いております」

「トラックでは、春島^{はるしま}に電探三基、夏島^{なつしま}に電探二基が設置されていますが、秋島、楓島、水曜島にも電

探の建設が進められています。夜戦型月光につきましては、一月初めまでに、新たに三部隊をトラックに配備できる予定だとの報告が届いております」

首席参謀の高田利種大佐が、胸を張って報告した。電探が全て完成し、月光の装備部隊が揃えば、トラックの守りは盤石になる。そう確信している口調だった。

「トラックの防衛態勢強化は喜ばしいことではあります、戦線の後退が憂慮されます」

参謀長の山口多聞中将が、はっきりした声で発言した。

第二航空戦隊司令官として、ビスマルク諸島沖海戦、第一次、第二次ニューギニア島沖海戦を戦った人物だ。

「参謀長には、航空戦に詳しく、かつ豊富な実戦経験を持つ者をいただきたい」という近藤の希望が海軍省に容れられ、実現した人事だった。

「今年の七月まで、我が軍はラバウルを最前線とし

てソロモン方面の米軍と対峙し、敵の北上を許しませんでした。ですが現在、この態勢は崩れており、我が軍がビスマルク諸島を制圧する以前の状態に戻っています。いや、米軍の巨大な物量が物を言い始めていることを考えれば、二年前より悪化していると言っても過言ではありません」

一昨年八月より始まったラバウルを巡る航空攻防戦は、この一月に転回点を迎えた。

米軍は銚先をニューギニアに転じ、新たな攻勢を開始したのだ。

今年一月のダンピール海峡沖海戦では、日本軍が勝利を収め、米軍の攻勢を一時的に食い止めたが、五月より始まった米軍の新たな攻勢により、同地の日本軍は劣勢に立たされた。

六月末までに、ニューギニア北東岸のラエ、マダシ、ウェワクが陥落し、七月にはビスマルク諸島の西側に位置するアドミラルティ諸島が占領された。

同諸島の主島であるマヌス島には、大規模な航空

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。